

平成24年度 兵庫県立こばと聴覚特別支援学校 学校自己評価

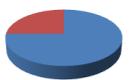
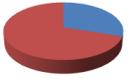
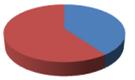
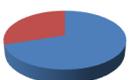
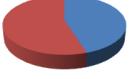
学校経営の重点

- (ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。
- (イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。
- (ウ) 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。
- (エ) 聴覚学習を通して個に応じた聴覚の活用を促すとともに、視覚情報を効果的に取り入れてコミュニケーション活動を活発にし、基礎的な言語の獲得を進める。
- (オ) 豊かな生活体験を通して基本的な生活習慣の確立をはかり、障害に基づく困難の改善と克服および自立を目指す人間性の素地を培う。
- (カ) 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。

自己評価基準 A 達成している ■ B おおむね達成している ■ C あまり達成していない ■ D 達成していない ■

(学校経営の重点) 各部の今年度重点目標と結果・課題				外部評価		
学部・分掌	具体的取り組み	結果と課題(改善方策)	各部評価	全体評価	記述評価	今年度の反省と次年度に向けて
保育相談部	(ア) 一人一人の発達や特性(個性や障害の特性)をふまえた指導を行い、幼児の全人的な発達を促す。				<p>聴覚活用に視点を置いた教材、特に絵本の有効活用は母子のかかわりという観点からも、重点的に取り組んでいく。また、保育相談部段階での、母子コミュニケーションの大切さについても改めて共通認識を図る。</p> <p>・音あそびだが、チャイムの音がわかっているのだろうか。小学校に行くとチャイムの音を聞くことになるが、小さいうちにチャイムの音がわかるようにしてほしい。チャイムの音を知らせるランプのようなものがあれば、いいのではないかな。</p> <p>・絵本の読み聞かせでは、親子のかかわりを大切に、お母さんの膝の上で読むなど、触れ合いを通じ鼓動や息づかいを伝えることも大切である。</p> <p>・母子の関わり方として、補聴器をうまくつけられなくても、子どもと気長にかかわってほしい。また、そのような母親をフォローしてほしい。</p>	<p>担任の授業力向上をめざし、授業研究や情報交換をはかる。また、環境構成に関しても今後さらに実践を深めていく。保護者のニーズは多岐にわたるが、丁寧に対応すると同時に、保護者同士の話し合いの場を大切にしてい</p>
	・幼児の聴力や音反応を把握し、聴覚活用を促す音あそび、歌、ダンス、手あそびに取り組む。	・子どもの発達や聴覚活用の状況に応じて、くり返しダンスや手あそび、音あそびを行った。どの子どもも楽しめる音あそびや限られた音楽材でくり返し楽しめる音あそびなどのバリエーションを増やすことが課題である。	B			
	・子どもの興味や発達にあった絵本を取り上げて読みきかせを行う。	・子どもの発達にあった絵本を選択することだけでなく、リズムカルに読んだり、読み方を工夫することでこれまで絵本の読みきかせをしていなかった親子も家庭で絵本を楽しむようになった。	B			
	(ウ) 親子の交流が活発に行われるよう、個々の親子の実態に応じた保護者支援を行う。					
・母子あそびや絵本の読みきかせをしている様子をビデオに撮り、ビデオをもとに親子のかかわり方や伝え方について母親に助言する。	・ビデオをもとに母親に助言するだけでなく、撮ったビデオを母親と一緒に見ることで、母親は自分のかかわり方を客観的にみて、視線を合わせることや子どもの反応に応じたかかわり方を意識するようになった。ビデオ撮りする回数が少なかったため、親子が緊張しない場面を設定し、回数を増やすことが必要である。	B				
幼稚部	(ア) 豊かな心とこばを育てるため保育内容の充実を図る				<p>・保育園でも、各クラス間の交流が難しくクラス毎の活動になってしまうことがある。そのため、ほかのクラスのことがわからないことがある。</p> <p>・保育園の保育士も保護者も、聞こえていることを前提に話をしてしまう。丁寧な言葉を使うことを(単語でなく文章で)保育園でも取り入れた。</p> <p>・こばとの交流で、ふれあうことだけでなく、教員同士の交流の機会をもてたらいいと思う。</p>	
	・幼稚園の教育、絵画指導、発達指導の各視点から外部講師を招き、学級ごとにアドバイスをもらい、保育に生かしていく。	・各クラス、学期に数回程度、外部講師を招き、絵画指導、保育についてのアドバイスをいただいた。補聴器点検や自由遊びのあり方について、積極的に取り入れた。また、幼稚部会の中で各クラスで受けたアドバイスの情報交換を行い、共有できるよう心がけた。	B			
	・集団でのコミュニケーション指導である「話し合い活動」の充実に向け、講師を招き指導を仰ぐ。また、個々の指導の在り方や指導力の向上を目指し、研究活動の時間に、各教師の保育ビデオを持ち寄り、分析を行う。	・1、2学期に講師を招いて、幼稚部の保育全体を見ていただき、アドバイスを受けた。また、「話し合い活動」や研究のあり方について指導を受けた。そのアドバイスをもち、木曜日の研究活動の時間に授業研究を行うことができた。	B			

	(イ) 保護者のニーズを把握し、支援の充実を図る。					
	・個別懇談、個別指導の後以外にも、保護者の希望に応じて懇談の時間を設ける。	・保護者の希望に応じて懇談の時間を設けるように心がけたが、時間的な制約があり限界がある。担任から積極的に声をかけることも必要と思われる。	B			
	・幼稚部会で、各クラスの保護者のニーズに関わる情報を共有する。	・幼稚部会の中で、情報交換を行うことができた。3歳児クラスの保護者が4・5歳児クラスを参観したり、卒業生の保護者の話を聴く研修など、すぐに対応できる内容もいくつかあった。	B			
	(カ) 聴覚特別支援学校としてのセンター的役割を果たす					
相談センター部	・地域の保健師を対象に懇談会を年2回実施し、学校見学・研修・意見交換等を通して、聴覚障害の理解と連携を深める。	・昨年度のアンケートに基づき次の3点を改善し実施した。①年度当初に案内を配布する②時間を午前中のみ短縮する③同じ内容で2回実施する。結果、参加者が大幅に増加し、全般的に満足したというアンケート結果であった。次年度は、限られた時間で効果を上げるため内容を精選し、さらに聴覚障害の理解と連携を深めたい。	A		・県が、補助費を出している児童デイサービスや放課後デイサービスという制度がある。今後は、職員への研修や指導も必要になってくるかもしれない。	管内保健師、小中学校への地域支援は、継続的な取り組みの必要性を感じる。同時に各地域の幼稚園に対しても取組を強化していく。
	・地域の小学校に在籍する聴覚障害児を対象に交流会を年2回実施し、子どもや保護者同士の交流、研修等を通して、仲間づくりや自己理解を進める。また、ニーズを把握するためにアンケートを実施し、次年度実施の参考とする。	・運動会(日)、学校公開デー(土)の午後に交流会を実施した。2回目は参加者の学校にも案内し教員の参加も数名あった。主に地域の普通学級に在籍し、聴覚特別支援学校の支援を受けたことがない子どもを対象としたが、情報が収集でき、保護者同士、子ども同士で交流できる場として、この交流会のニーズは非常に高いことがわかった。時間の都合でアンケートは実施できなかったが、日程等について課題が残るので、次年度は実施形態も含めて改善し実施したい。	A		・卒業生の親対象交流会を実施してもらえると有難い。(こばと交流会と一緒にでもよい。)	
教務部	(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮し、一人一人のニーズに応じた教育を行う					保育相談部、幼稚部共に指導計画のリニューアルを図る。
	・子どもの発達と実態及び現在の教育内容に即し、平成22年度から行ってきた保育相談部保育計画・幼稚部指導計画の見直しを今年度完成させる。	・各部内で検討し、様式等も含めて見直しを行い完成させた。保育相談部では、指導計画を毎月から2～3ヶ月単位で作成し直した。新たに、参考となる歌や絵本等を示した。幼稚部では、各学年で現在の発達に応じて見直しを行った後、学部全体で調整を行った。	B			
研究部	(イ) 幼児の発達と聴覚学習の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。					研究テーマを絶えず見直すと共に、外部講師を活用し、教師間でも日々研鑽を深める。
	保育相談部、幼稚部それぞれのニーズに応じてテーマを設定し、週1回研究活動を行う中で、本校保育の在り方について考える。	・年度当初に、各部ごとに研究テーマを設定しそれに基づいて、週1回程度の研究活動を行うことができた。保育相談部、幼稚部各々で活動を行っているので、全教員が共通理解する場が必要である。	B		・環境構成が大切である。保護者が保育室に入ると、空間が狭くなる。自由に遊び込めるような時間を取ることも考えると、保育室をどのように使用するか、今後考える必要がある。	
	年に一度全担任が研究授業を行い、一人一人の指導力の向上を目指すために授業研究や授業分析をする。	・全担任1回ずつ研究授業ができた。また、外部講師を招へいして授業研究会を行い、授業分析を行うことで指導力は高まりつつある。	B		・教室内にクッキングコーナーがあれば、広がりのある活動ができる。やりたい気持ちを持たせる環境作りが必要である。	
	(ウ) 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。					
	・成人聴覚障害者や卒業生保護者の話をきくなど、保護者のニーズに応じた保護者研修会を企画し実施する。	・昨年度末のアンケートで保護者のニーズをつかみ、本校卒業生の保護者による研修を行い、進路先での実践や課題などについて話を聞いた。その他の内容についても月に1回程度の保護者研修を企画し、実施できた。	A			

生活部	(ア) 一人一人の発達や特性(個性や障害の特性)をふまえた指導を行い、幼児の全人的な発達を促す。				季節ごとの行事を教材化し、保育に絶えず変化を持たせる。花壇や畑などを活用した体験型の活動を積極的に取り組む。
	・クリスマス会や生活発表会など子どもたちが主体的に参加できる行事を計画し、すすめる。	・保育行事は、教職員間で連携を取りながら円滑に進めることができた。クリスマスツリーやお正月飾りなど玄關の環境設定においても季節に応じた工夫を行った。今後も子どもたちに季節感を感じられるような行事や環境を考えていきたい。	A		
生活部	・各クラスに花壇を割り当て、楽しんで草花を育てたり、畑に季節の野菜を植えて育てるなど、子どもたちが主体的に自然と触れ合う機会をつくる。	・各クラスで春と秋の2回、種や球根を植えることができた。畑には、サツマイモだけでなく、季節の野菜を育て、成長の様子や収穫を楽しみ、季節感を味わうことができた。子どもたちが動植物に触れ合う機会をもてるよう環境を整備していく。	B		
	・不審者対応訓練や防災訓練や避難訓練を実施し、命の大切さや安全に対する意識を高める。	・避難訓練では、火災・地震などの災害に応じた避難の方法を学ぶことができた。職員不審者対応訓練では、実際の場面を想定し、連絡方法などを確認し、警察の指導をいただいた。訓練を大切に、実際の災害に備え、防災意識を高めた。	B		・防災について、体で感じる防災が必要と考える。人と防災未来センターでは、手話での説明もある。行ってみたいかどうか。
生活部	(オ) 豊かな生活体験を通して基本的な生活習慣の確立をはかり、障害に基づく困難の改善と克服および自立を目指す人間性の素地を培う。				・保育園では、避難訓練はしているが地震の訓練はできていない。地震のテレビでの映像等で、かえって地震のショックを受けることももある。どのように訓練するか難しいところである。年長のこどもであれば、そういうところに行っても大丈夫かもしれない。
	・子どもたちが主体になる楽しい活動を取り入れ、子どもたちが食べ物に直接触れ、食べる楽しさを体験する機会をつくる。	・今年度「咀嚼力向上」のための取り組みを行うなかで、親子での活動やクッキングを多く取り入れることができた。また、幼稚部全体の体験活動も実施できた。今後は、体験活動等を継続的、計画的に実施していくために食育推進委員会を中心に保育と連動した年間計画を立てることが課題である。	B		
	・家庭での食育を推進するために保護者向けに給食だより、親子給食、掲示物の工夫をする。	・咀嚼力について、食育についてそれぞれ保護者研修を行うことができた。実施したアンケート結果からも食育への理解と関心を高めることができたと感じる。掲示物、配布物等で発信した情報が保護者に周知されていない場合があったので、保護者のニーズに応じた情報提供や、掲示物の工夫が課題である。	B		
情報部	(ア) 幼児が絵本に親しむ環境作りを行う。				絵本の読み聞かせボランティアは読書をより身近なものに育てていくための活動であるので、さらなる工夫をしていく。ホームページ作りは、今や欠かせない情報ツールであるので、こまめな更新を絶えず心がける。
	・毎月2回(水曜日の午後)、ボランティアの方とともに絵本の読み聞かせを開催する。	・絵本の読み聞かせは、毎月ほぼ2回開催することができた。しかし、6, 7, 11, 12月は1回の開催となった。来年度は月2回実施できるように連絡調整をしたい。	B		
	・図書室をより利用しやすくするために本棚を整理し、入口の絵本ラックには月ごとに季節の絵本を選んで置くようにする。	・年度当初に絵本棚の整理をし、絵本を取り出しやすいようにした。その後も一か月ごとに整理したが、さらに利用しやすい工夫が必要である。また、月ごとに季節の絵本やおすすめの絵本をラックに置くことで、意識して本を借りている親子もみられた。今後は、新しい本の紹介も積極的に行いたい。	B		
	(カ) 聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。				
情報部	・ホームページで本校の様子を随時紹介し、聴覚障害児教育に関する情報を広く発信していく。また、今年度は、さらに魅力のあホームページになるようにデザインや記事の内容を見直す。	・1学期にホームページのデザインを一新し、乳幼児が通う学校らしいかわいらしいデザインに変更した。主な行事や毎日の給食を写真入りで紹介し、在籍児の保護者からも好評であった。また、ホームページを見て教育相談の申込をするケースが増えている。	A	